

中国・中日医学教育センター プロジェクト巡回指導調査団 報告書

平成5年10月

国際協力事業団
医療協力部

医	一
J	R
93-31	

中国・中日医学教育センター
プロジェクト巡回指導調査団
報 告 書

JICA LIBRARY

1115095[0]

平成 5 年10月

国際協力事業団
医療協力部

国際協力事業団

26631

序 文

中日医学教育センタープロジェクトは、中国医科大学の日本語クラスをモデルとしてこれまで中國で実施されてきた医学教育の方法及び内容を日本で実施している医学教育を念頭におきつつ将来の中国に適した教育内容に改善することを目的として協力を開始しました。

本プロジェクトは開始当初設定した目標に沿って順調に進展しており、昨年以降1年間に次のようななめざましい成果を挙げました。

93年度の重要課題であるカリキュラム開発については、日中双方の専門家で構成されたカリキュラム委員会から改善（案）が提出され、93年9月に入学した学生から本カリキュラムを試行することになりました。

教材開発については対象40科目中38科目について原稿が作成され、作成されたものから遂次授業で使用されつつあります。

教授法開発の一環として短期専門家を中心に実施されてきた臨床通論（臨床専題講座）については5、6年生を対象に93年9月より実施されることになりました。

このように本プロジェクトの協力の成果は定着しつつあり、この成果が中国国内に広く普及することを願ってやみません。

最後に、今回の巡回指導調査団員として対応頂きました団員の方々に感謝しますとともに、日頃より本プロジェクトを支援頂いております国内関係者の皆様にあわせて御礼申し上げます。

平成5年10月

国際協力事業団

医療協力部長

小早川 隆 敏



ミニッツ交換
右：細田団長
左：何校長



中国側から
活動報告を受ける



建設中の
センター付属病院を
見学する

目 次

1. 巡回指導調査団の派遣について	1
1-1. 派遣の経緯と目的	1
1-2. 団員構成	1
1-3. 調査日程	2
1-4. 主要面談者	2
2. 要 約	4
3. 巡回指導内容	6
3-1. プロジェクト協力計画内容について	6
3-1-1. カリキュラム開発	6
3-1-2. 教材開発	6
3-1-3. 教授法開発	7
3-1-4. 臨床指導	7
3-1-5. 共同研究	7
3-1-6. 技術普及	8
3-2. 技術協力計画について	8
3-2-1. 専門家派遣	8
3-2-2. 研修員受入れ	9
3-2-3. 供与機材	10
別添資料	11

1. 巡回指導調査団の派遣について

1-1 派遣の経緯と目的

中日医学教育センタープロジェクトは、中国医科大学の日本語クラスをモデルとしてこれまで中国で実施されてきた医学教育の方法及び内容を日本で実施している医学教育を念頭におきつつ将来の中国に適した教育内容に改善することを目的として協力を開始しまもなく5年目を迎えた。

プロジェクト開始以来本調査団派遣時点までに、長期専門家3名、短期専門家43名の派遣ならび19名の研修員の受入れを実施し、カリキュラム開発、教材開発、教授法開発を中心とする技術協力を継続してきた。

今回の巡回指導調査団は平成5年度実施計画の進捗状況と昨年10月の巡回指導時点の課題への対応状況の確認、残余協力期間の実施方針を策定することを目的として派遣された。

この他中国側から既に非公式ベースで本プロジェクトの成果を基礎にセンター附属病院を使用した臨床教育に対する協力の打診があったため、センターのあるべき方向性につき技術的助言を行なった。

1-2 団員構成

団 員 細田泰弘

(総括) 慶應義塾大学医学部長

団 員 小宮山莊太郎

(外科学) 九州大学医学部耳鼻咽喉科学講座教授

団 員 佐々木毅

(内科学) 東北大学医学部第二内科助教授

団 員 長谷川和弘

(協力計画) 文化省高等教育局医学教育課企画係長

団 員 鈴木有津子

(業務調整) 国際協力事業団医療協力部医療協力第一課

団 員 山下智子

(通訳) 日本国際協力センター研修監理員

1-3 調査日程

月 日	曜 日	行 程 及 び 調 査 内 容
9月7日	(火)	10:55 成田→大連 NH903 (移動) 13:35 大連→瀋陽 車輌にて移動 19:45 調査日程打合せ
9月8日	(水)	09:00 中国医科大学・中日医学教育センター表敬 09:40 中国側との打合せ(平成5年度計画実施状況、平成6年度実施計画案について) 14:00 平成5年度研修員面接 15:00 中国側との打合せ(プロジェクトの発展の方向性)
9月9日	(木)	09:00 供与機材使用状況調査及び関連施設視察 12:00 領事館報告 14:00 ミニッツ作成 17:45 ミニッツ署名
9月10日	(金)	07:15 瀋陽→北京 CJ-6101 (移動) 10:00 JICA中国事務所報告 12:15 日本大使館報告 14:00 国家科学技術委員会報告 15:00 衛生部報告
9月11日	(土)	報告書作成及び資料整理
9月12日	(日)	15:15 北京→成田 NH906 (移動)
9月13日	(月)	11:10 北京→福岡 NH1108 (移動)〈小宮山団員〉

1-4 主要面談者

中国側関係者

(国家科学技術委員会)

葉冬柏 国家科学技術委員会国際合作司日本処副処長

蔡志平 国家科学技術委員会国際合作司日本処

(衛生部)

曹榮桂 衛生部辦公室主任

高細水 衛生部外事司連絡処処長

侯殿昌 衛生部外事司項目官員

(プロジェクト関係者)

何三光 中国医科大学校長

華桂嵐 中国医科大学校務委員会主任

李厚文 中国医科大学顧問

孫開來 中国医科大学副校長
金魁和 中国医科大学副校長
李和泉 中日医学教育センター副主任
韓民堂 中国医科大学副校長
董貴章 中日医学教育センター業務処處長
路振富 中日医学教育センター業務処副處長
才 越 中国医科大学日本医学教育研究所副所長
王振凱 中国医科大学外事処處長
張 戈 中国医科大学教務処處長
劉秀梅 中国医科大学神経内科主任
趙 忱 中日医学教育センターチーフアドバイザー秘書
徐明利 中日医学教育センター秘書

日本側関係者

(大使館)

肥塚 隆 日本大使館經濟部長
蒲原基道 日本大使館一等書記官

(総領事館)

大和滋雄 日本国駐瀋陽総領事
斎江 知 日本国駐瀋陽領事
久保博之 日本国駐瀋陽副領事
佐々木勝 日本国駐瀋陽副領事

(JICA中国事務所)

新保昭治 JICA中国事務所所長
中村俊男 JICA中国事務所副所長
岡田 実 JICA中国事務所所員

(プロジェクト専門家)

渡辺陽之輔 チーフアドバイザー
曳地和博 業務調整員
川村光毅 短期専門家（解剖学）
大前和幸 短期専門家（公衆衛生学）

2. 要 約

中日医学教育センタープロジェクトは本年で第4年度を迎えるに至った。

本年度の巡回指導調査団の課せられた調査内容、項目は以下の通りである。

- (1) プロジェクトの進捗状況の確認と前回の巡回指導時点の課題への対応状況の確認
 - ①プロジェクトへの投入実績
 - ②これまでの協力により得た成果
- (2) プロジェクト実施全体計画の見直し
 - ①94年度協力計画（案）の策定
 - ②協力終了時までの方針決定並びに計画の調整
- (3) プロジェクト終了後の中国側対応案についての聽取

平成4年の巡回指導調査団は専門家の派遣されていない科目及び日本語が有能な教官の少ない教室においてはカリキュラム開発にある程度の遅れのあることが指摘され、供与機材の活用状況について、より利用度を向上させる必要性が指摘された。

また、受入れ予定研修員の日本語能力の不十分な点も課題とされた。

以上の如き課題について調査を行った。

(1) 1993年度進捗状況

渡辺チーフアドバイザーの示唆を受け、中国側は関係部門責任者、専門家、教授より成るカリキュラム委員会を発足させ、現カリキュラムの改善を行うこととし、現在第3案が作成された。

その重点は①臨床医学への早期接触、②医学概論の新設、③自主的学習能力の強化、④社会医学科目的強化などである。

日本語教材の作成も順調に進行し40科目中38科目がすでに完成し、本年度末には全て完成予定である。

授業方法として『専題総合講座』（特定のテーマに対する多数の教員による講義）やC.P.C.が導入されることとなった。

以上、1993年度については順調に進行しているものと評価された。

(2) 1994年度プロジェクト実施計画について

中国医科大学側は開発されたカリキュラムを新入生に対して試行しながら改善を図り、来年度終了時に総括を行うこと、またプロジェクトの延長の有無にかかわらず、更にカリキュラム改革を行うという意向を示した。

未だ日本側から短期専門家の派遣が行われていない科目については可能な限り実現を図ることとされた。

受入れ予定研修員との面接では、意欲等も含め総合的に判断して受け入れることとした。

供与機材としては臨床教育に用いる機器の導入を主体として行う必要性が認められた。

以上、中国医科大学関係者並びに渡辺チーフアドバイザー、短期派遣専門家等の熱意と努力により、卒前教育については、かなりの改善が見られ、特に中国医科大学教員の支持が得られ、カリキュラム改革へ自主的に取組む意欲が生じつつあるように感じられた。

3. 巡回指導内容

3-1 プロジェクト協力計画内容について

3-1-1 カリキュラム開発

カリキュラム開発についてはプロジェクト開発当初に①麻酔科の独立、②脳外科の時間数の増加の2点につき改善が図られた。しかしながら本活動は中国の教育制度と密接な関係を持つことから早急な判断は回避し教授法開発及び教材開発の状況を見極めたうえで総合調整することで双方合意し、その他のプロジェクト活動を重点に実施してきた。

その後、教授法及び教材開発が部分的定着、完了してきたため、本年4月に日本側長、短期専門家と中国側関係部門責任者で構成するカリキュラム委員会を発足させ、本格的なカリキュラム改善に着手した。

すでに委員会では第3案を提案し、10月に開催される現地セミナー『中日高等医学教育カリキュラム討論会』において成果を発表し、セミナー参加者からの意見も踏り93年末までに最終案を固める予定である。

本活動への支援として日本側から医学教育、カリキュラム改善に豊富な経験をもつ専門家3名を派遣し、①日本医学教育の現状、②アメリカ医学教育の現状、③日本でのカリキュラム改善における経験と実績の3テーマで講演を行う予定である。

また、中国側は本年9月に入学した日本語クラス学生に対し新カリキュラムを試行しながら修正し、94年末に実施状況の評価を予定している。94年末以降についてはプロジェクトの延長いかんにかかわらず実施する新カリキュラムにつき毎年評価し改善を図り、その成果を踏まえ、中国語クラスにも普及していく意向をあわせて表明した。

このように平成4年度巡回指導調査団派遣（平成4年10月）以降、本活動においてはめざましい発展がみられ本年5月の合同評価の際には更に高い評価を得られるものと思料される。

3-1-2 教材開発

平成4年度巡回指導調査団派遣（平成4年10月）時点では基礎、臨床40科目中32科目の原稿完成にとどまっていたが、今回の巡回調査の時点で38科目が原稿を完成させている。しかしながら教材開発の進度が多くの科目において同じような状況にあることから、現有的パソコン、ワープロの台数では対応しきれず入力待ちとなっている科目も多い。これについては今後派遣される科目の専門家の教材開発業務にも支障を来しかねないので、携行機材等で早急に対処する必要があると思われた。

教材未編纂となっている法医学、心療学の2科目については、前者は本年11月に短期専門家派遣が予定されており、また後者については現在日本で研修中のカウンターパートが94年3月を目標に原稿作成に携わっており、プロジェクト終了までには40科目全てを完成させる目処が立って

いる。

既に製本印刷を終了した20科目については授業で使用されており、評価を待つて中国側により補充、改訂を図っていく必要がある。

以上のとおり本活動についてもプロジェクト終了までに所定の目標を達成することが可能と思料された。

3-1-3 教授法開発

学生の自主的学習の促進かつ総合的な判断能力の養成を目的として『専題総合講座』、『C. P. C.』をこれまで短期専門家の協力を経て実施してきたが、中国側独自に実施できるようになり本年9月より5、6年生を対象に7テーマにつき実施されることになった。

前回の巡回指導調査団も中国側に質問したことであるが、中国においては解剖に対する考え方が日本と異なるため、外科解剖材料がほとんど手に入らない。このため材料が手に入らない場合は病例討論に替えC. P. C.を実施するとの回答であり、改善までに相当長い時間を要すとの印象を受けたがこれらの教授法がカリキュラムに反映された中国側独自で実施に至った事実は高く評価すべきであり、今後はその内容改善につき指導を強化していくことが必要である。

この他薬理学の日本語クラスの授業を参観したが、OHPを使用し、かつプロジェクトで開発した教材が用いられていた。佐々木調査団員によれば2年半前専門家として指導にあたった当時には見られなかったことであり、視聴覚機材を使用した教授法も教室によって徐々に定着しつつあると思われた。

3-1-4 臨床指導

専門家滞在中の業務の重点が教材開発、講義のデモストレーションにおかれているため可能な範囲でカウンターパートとの合同回診等単発的に対応してきたが、教材開発が一応の目処が立った教室から臨床指導の専門家の派遣要望が出てきている。今年度この要望に応え、日本側が供与したマイクロサーボジャーを活用した研究のため脳神経外科専門家を再派遣する予定である。中国側と同専門家は共同研究を実施し、既にその成果が論文として発表されている。本協力のための専門家の再派遣或は特定テーマに絞った関連専門家の派遣については中国側の具体的要望を取りまとめ提出するよう指示した。国内委員会において中国側の要望内容を検討のうえ可能な範囲で対応することが望まれる。

3-1-5 共同研究

3-1-4 臨床指導で述べた脳神経外科短期専門家との間で実施された『中国と日本における原発性脳腫瘍の比較』の他、生理学教室と生理学短期専門家との間で『モルモット内耳有毛細胞single ion channel記録技術開発』につき共同研究を実施した旨中国側から紹介があった。

最終的には現在日中双方の専門家の間で実施されている『カリキュラム開発』も共同研究として成果が発表される見込みである。

このように当初実施が心配されていた共同研究も協力体制の整った教室により実施されつつあり、プロジェクト終了までには評価に耐え得る成果が挙げられるものと思われた。

3-1-6 技術普及

中日医学教育センターへの技術協力の成果を中国で実施しているJICA医療案件と中国の東北地区にある日本語による医学教育を実施している機関に対し普及させるため、短期専門家を中心とする特別講演、講義を継続してきた。今後派遣される専門家についても可能な範囲で本活動を継続することとした。

この他昨年に引き続き衛生部、国家教育委員会、その他全国の医学教育機関の関係者を集め、カリキュラム開発を主要テーマとする現地セミナーを実施する予定である。日本側は(1) 日本医学教育の現状、(2) アメリカの医学教育の現状、(3) 日本でのカリキュラム改善における経験と実績の3テーマに対応するため講師派遣を準備している。本セミナーで中日医学教育センターで開発されたカリキュラムにつき討論を行い、その結果を開発中のカリキュラム改善に役立てる予定である。

来年度はプロジェクトの最終年度にあたることから、中日医学教育センターの一連の技術移転の成果を全国の医学教育関係者に対し紹介し、関係者から意見を聴取する機会として同様な現地セミナーを実施することで双方合意した。

3-2 技術協力計画について

3-2-1 専門家派遣

昨年長期専門家が実施した教材開発進捗状況調査の結果、短期専門家の派遣と教材開発の進度には密接な関係があることがわかり、平成4、5年度は専門家派遣を前倒し実施することになった。一部の科目を除き、調整後の計画は大旨順調に進んでおり、この結果は教材開発速度の大幅アップにつながった。専門家未派遣の3科目（心療学、産婦人科学、微生物学。ただし微生物学については教材開発に対応する専門家は本年11月に派遣される。）については平成6年度計画に反映されることで合意した。

この他中国側より、特別テーマに対する臨床指導、または共同研究の継続を目的として専門家の派遣（再派遣、日本側担当教室の別の専門家の派遣）の要望があった。調査団訪問時に要望があったのは、(1) 病態生理学、(2) 整形外科学、(3) 呼吸器内科学、(4) 一般内科学、(5) 一般外科学、(6) 循環器内科学であったが要望内容の詳細につき中国側がとりまとめていなかったため、対応については中国側の具体的要望書の提出を待って対応可能性につき国内委員会で検討することとした。本要望についてはリーダー会議用資料内容として反映される見込みである。

本巡回指導調査団派遣方針会議の際懸案となっていた実験診断学専門家の派遣については中国側より次の内容の資料の提出があったところ対応可能性につき検討を依頼する必要がある。

実験診断学専門家の派遣について

1. 目的及び指導内容

- ① 内科実験診断学教科書の編纂指導。教科書の原稿は完成している。日本人専門家の協力を経て教科書の内容、日本語の用法等の修正を行いたい。
- ② 日本と中国の授業方法の相違点の紹介と講義のデモストレーション

2. 研究指導

① 膜原病に関する実験室診断技術の指導

- 内容：・抗sm抗体、抗RNP抗体、抗SSA抗体、抗SSB抗体、抗J0-1抗体、抗Sc-70抗体及びANAの定性テスト
・ds-DNA、Clq免疫複合体、CL抗磷脂質抗体、IL-2レセプターCRP及びRFの定量テスト
・HLA分型及び検査技術
・膜原病の免疫病理技術

② 血小板Ca²⁺、calmodulin及びprotein kinase Cの加齢的変化

③ 血栓準備状態の血液分子マーカーの測定

3. 講義の実施

- ① 膜原病に関する検査技術の進展
- ② 止血、血液凝固及び血小板機能に関する実験室検査

4. 携行機材（試薬）

- ① トロンボモジュリン測定用キットMGC-01-001
- ② トロンビン・アンチトロンビンⅢ複合体(TAT)測定用EIAキット或はTDC-86
- ③ TDC-88(帝人株式会社)
- ④ HLA-B27標準血清
- ⑤ Calmodulin測定キット、血小板CAMP測定キット

3-2-2 研修員受入れ

平成5年度カウンターパート研修員については昨年巡回指導調査団により日本語能力を中心と

する面接が実施され人選については決定しているため、今回の調査団においては、3大学の各調査団員が受入れ担当教室にかわり、教室からの質問事項、カウンターパートからの質問事項を確認することとなった。確認結果は各団員より受入れ担当教室等関係者に報告される。

当初計画では平成5年度カウンターパートの受入れを以て予定数は終了するが、技術移転の対象とした40科目の約5分の2の教室がカウンターパートを派遣できないこともあり、中国側からは平成6年度についても受入れの要望が出された。調査団訪問時点では在外からの研修員要望とりまとめの最中であり、全体調整後、国内委員会の検討を待って対応可否につき中国側に回答することとした。中国事務所、プロジェクト長期専門家の情報によれば、中国側の要望リストに本プロジェクトカウンターパート5名が計上されているとのことである。

3-2-3 供与機材

平成5年度機材については現在購入手続き中である。基礎及び教材開発のための事務機器についてはほぼ予定どおりの機材配置ができ、中国側の一層の活用を期待するところである。

平成6年度機材については、プロジェクト最終年度であることから、供与済みの機材のスペア部品を中心に供与することとした。

供与機材は丁寧に使用されているが、以前と比べ良くなりつつあるもやはりまだ中国的管理が行われているようだ（管理担当者がカギをかけて管理しているため自由に利用されているとは言い難い）この方面的改善については時間をかけて指導していくしかない。特に2年前に開設された日本語図書室は同時に数人の利用できる程度のスペースしか確保されていないため、指導者がテーマを与え、自主学習を推進するような教授法は物理的にとりにくい状況となっており、一層の活用のためにはスペースの確保が必要とみうけられた。また機材導入に際しては現地代理店の有無等を考慮してきたが、プロジェクトも最終年度に入ることから機材の消耗品の確保体制、在庫管理につき意識を促していく必要がある。

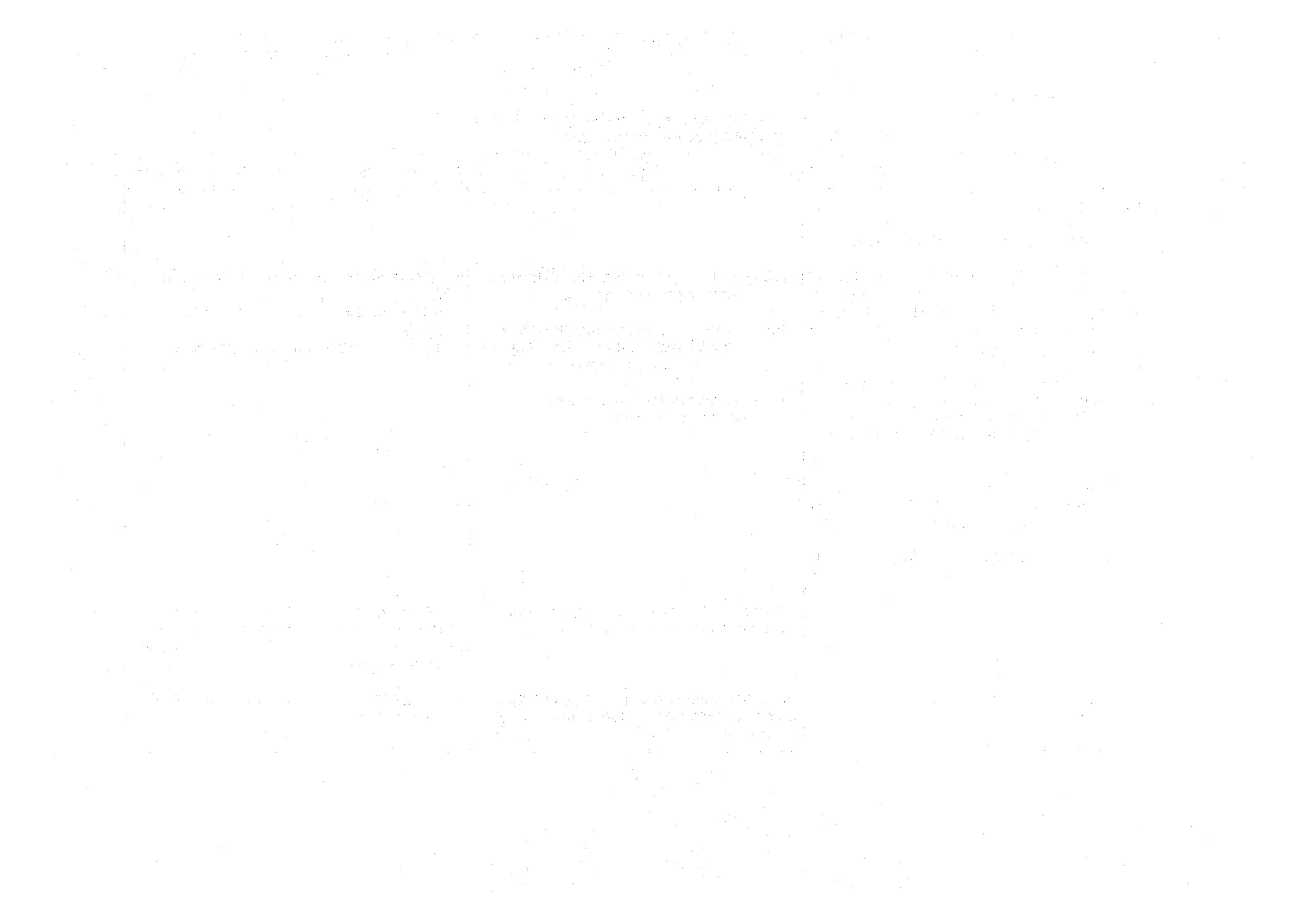
別添資料

- ① 巡回指導調査団対処方針
- ② 会議議事録（日本語版並びに中国語版）
- ③ 1993年度中日医学教育センタープロジェクト進捗状況（中国側提出資料）

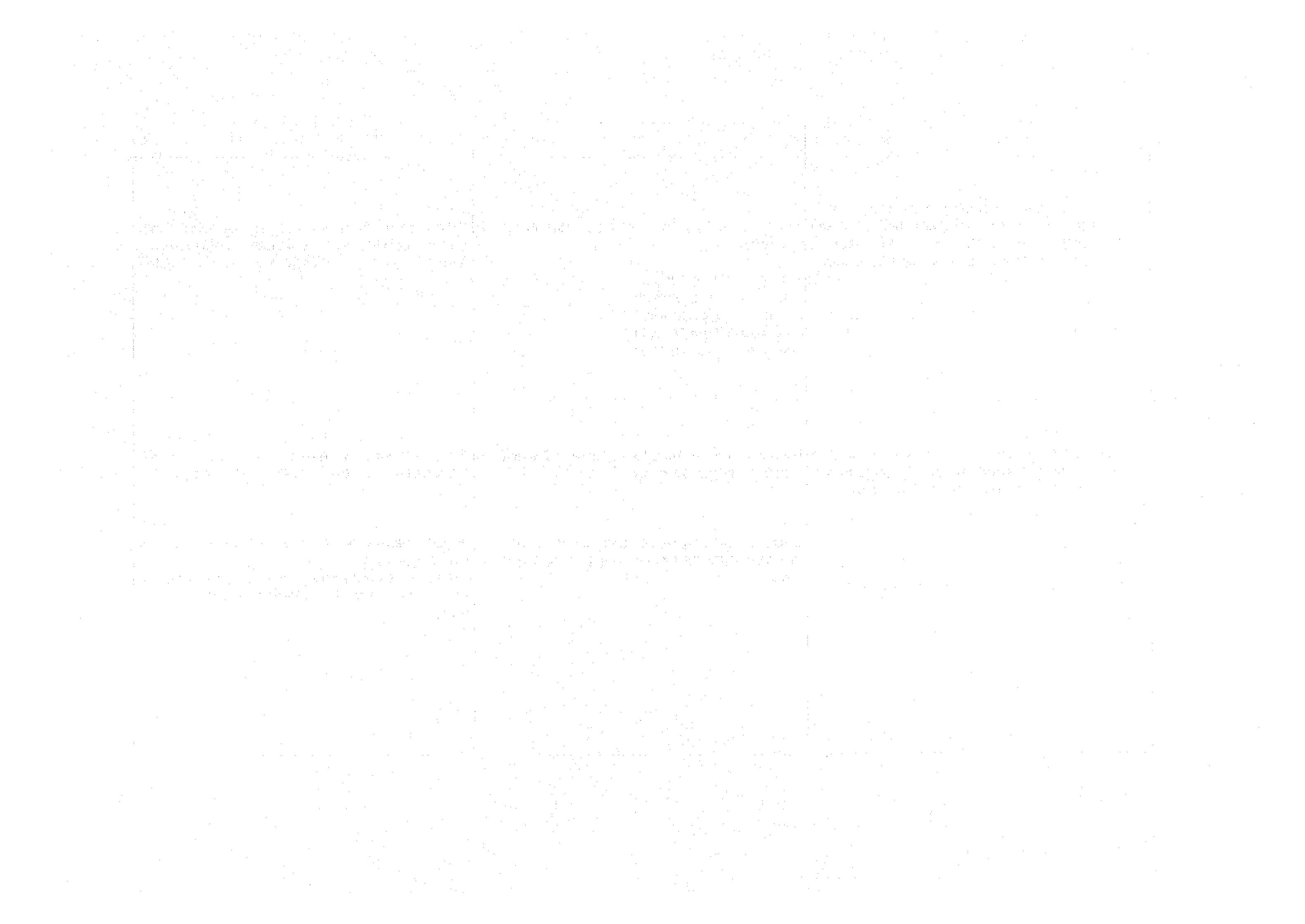
①巡回指導調査団対処方針

中日医学教育センタープロジェクト
巡回指導調査団対処方針

調査・確認・協議事項	現状問題点等	調査団の対処方針
<p>I. 技術協力計画について</p> <p>1. 専門家派遣</p> <p>前回（平成4年10月）の巡回指導調査団の協議内容</p> <p>①教材開発状況に鑑み、その対象科目の中で未だ日本側から短期専門家が派遣されていない科目を最優先して派遣することで双方合意した。これを受け、日本側は国内の関係機関と協議したうえで可能な限り、次の計画に沿って調整を行うこととした。</p> <p>平成5年度派遣予定専門家の分野（中国側と合意済の科目）</p> <p>前期分（1993年3月～7月）</p> <p>派遣科目：微生物学、公衆衛生学、整形外科、免疫学、産婦人科、医化学、消化器内科、超音波診断学、遺伝学</p> <p>後期分（1993年9月～1994年3月）</p> <p>派遣科目：解剖学、寄生虫学、病態生理学、耳鼻咽喉科、神経内科、法医学、心臓外科</p> <p>追加要望：有機化学、脳神経外科、実験診断学、セミナー講師</p>	<p>①派遣済：免疫学、有機化学、整形外科、医化学、超音波診断学、遺伝学（平成4年度予算にて対応）</p> <p>派遣予定：脳神経外科、公衆衛生学、産婦人科、消化器内科、実験診断学、解剖学、寄生虫学、病態生理学、耳鼻咽喉科、神経内科、法医学、心臓外科、セミナー講師</p> <p>平成5年度に再派遣：微生物学（講義・講演中心）</p> <p>昨年の協議の結果のとおり実施予定</p> <p>②教材開発及び臨床、技術指導に対し、具体的計画性がなく、日本人専門家の有効活用がなされているとは言い難い。</p> <p>③日本人専門家が滞在中は共に行動し、技術指導や教材開発業務を行っているが、専門家帰国後は旧態依然の状況になっているケースが見受けられる。</p>	<p>①・微生物学については平成6年度に実施する方向で派遣計画（案）に盛り込む。</p> <p>・平成6年度実施計画（案）につき意見交換し、内容をミニットに反映させる。</p> <p>例：現地セミナーの実施、必要分野の専門家の再派遣等</p> <p>②・短期専門家の経歴書を入手した時点で専門家の専門分野に応じ、各科目のカウンターパートに詳細な業務計画を作成させ、その計画をもとに専門家と打合せのうえ実施するよう提案する。（後期派遣予定の専門家から適用）</p> <p>③・中国側が定期的に実施内容を調査し、その問題点を定例会議の席上発表させ協議する。</p>



調査・確認・協議事項	現状問題点等	調査団の対処方針
<p>2. 研修員受入れ</p> <p>前回（平成4年10月）の巡回指導調査団の協議内容</p> <p>①日中双方の関係者は1992年度の研修員候補者と面談し、専門知識、語学能力を総合的に判断したうえで心理学、核医学、免疫学、生理学、内科の各1名を1年間受入れることとした。</p> <p>②1993年度研修員候補者15名と面談した。そのうち、専門知識及び語学とも比較的優秀な者7名を推薦し、中国側とチーフアドバイザーが最終選考を行い5名を決定することとした。</p>	<p>①平成5年度研修員として次の5名を内定し、平成6年3月下旬から1年間受入れ予定。</p> <p>薬理学：魏敏杰（慶應大学） 眼科：張勁松（九州大学） 一般外科学：魏春果（九州大学） 循環器内科：張月蘭（東北大学） 臨床検査学：康輝（慶應大学）</p> <p>②本件プロジェクトの主旨から考えて、研修の中で『医学教育方法及び技術』の強化を図る必要がある。</p> <p>③本協力では40科目の教室を対象としているがカウンターパート研修を実施する科目は研修員受入枠により限定され半数の科目は実施できない。</p>	<p>①平成5年度研修員との面接を実施する。受入れ大学の調査団員はあらかじめ受入れ担当教室から確認事項を聴取し、研修員面接の際これを基に確認する。あわせて研修員に対し来日に係るアドバイスを行う。</p> <p>②各大学の研修で授業見学時間を多くし、教材の使用方法及び教授方法を体験させることができるように、研修担当各教室に依頼する。</p> <p>③研修員枠の増加は不可能であることから民間ベースの協力による研修員受入れを検討する。 ・可能な限り、日本語医学クラスの授業を行う後継者のいない教室に限定する。また、過去に派遣した研修員の科目と重複しないように配慮する。</p>

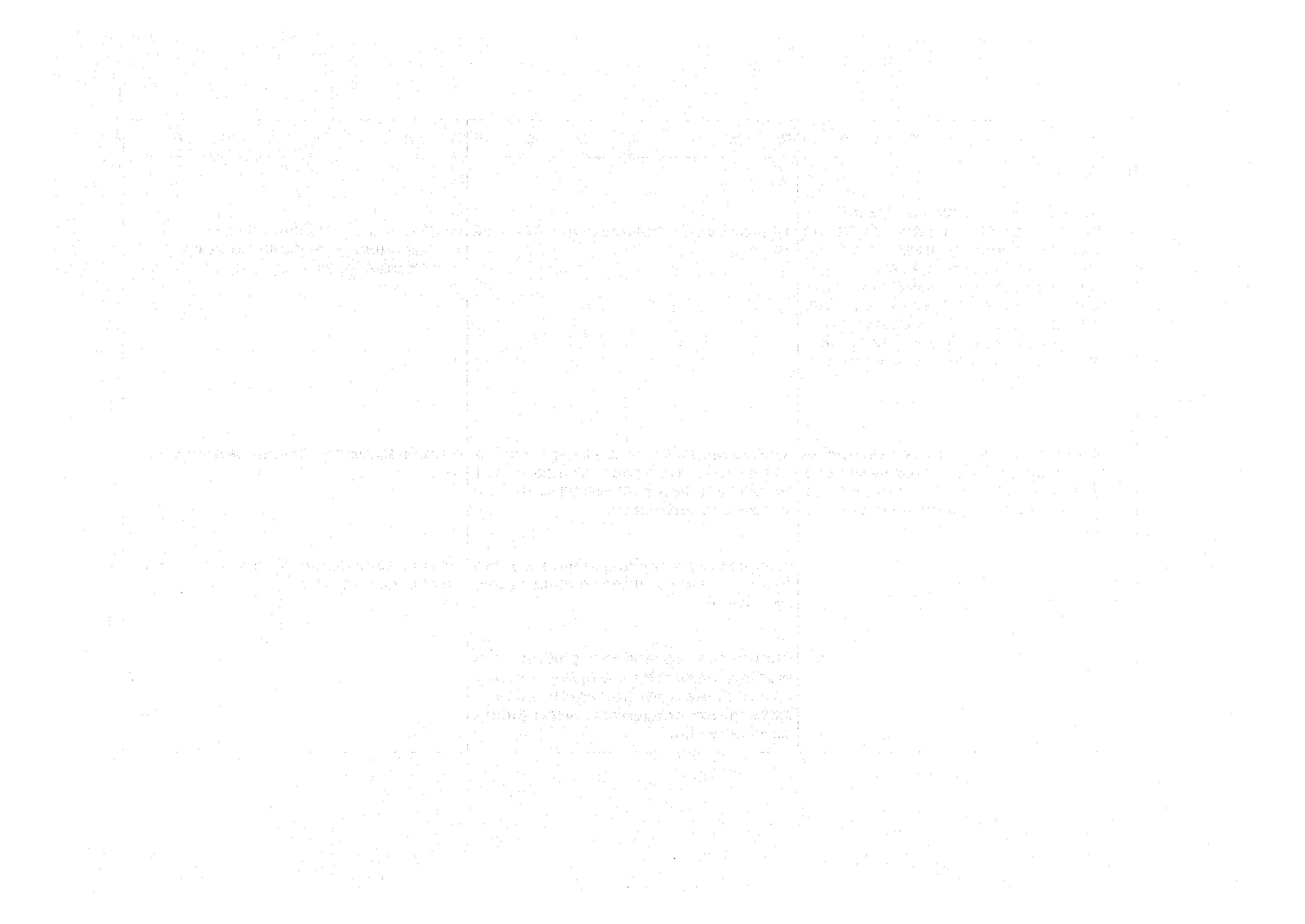


調査・確認・協議事項	現状、問題点等	調査団の対処方針
3. 機材供与 前回（平成4年10月）の巡回指導調査団の協議内容 ①日中双方は先の『計画打合せ調査団』の基本方針及び業務の展開状況を踏まえ、1993年度の供与機材は基礎医学教育に必要な機材に加え手術室の教学用モニター機器、教学用内視鏡関係機材等が適当である旨意見の一致をみた。 ②日本側は供与された機材がすみやかに設置されるようその手続きおよび財政的手当を円滑に行うよう中国側に要請した。	①供与予定金額（5,000万円） 供与予定機材：血液ガス分析装置、生物顕微鏡、VHS視聴覚教材編集装置、4チャンネル監視記録装置、電気生理アンプシステム、レーザードップラー血流計	①・平成5年度機材の内容及び送付時期見通しについて報告、説明を行う。 ・10月の予算見直しの際、臨床機材の追加供与を検討する。 ②・平成4年度巡回指導調査団派遣後の改善状況の確認。



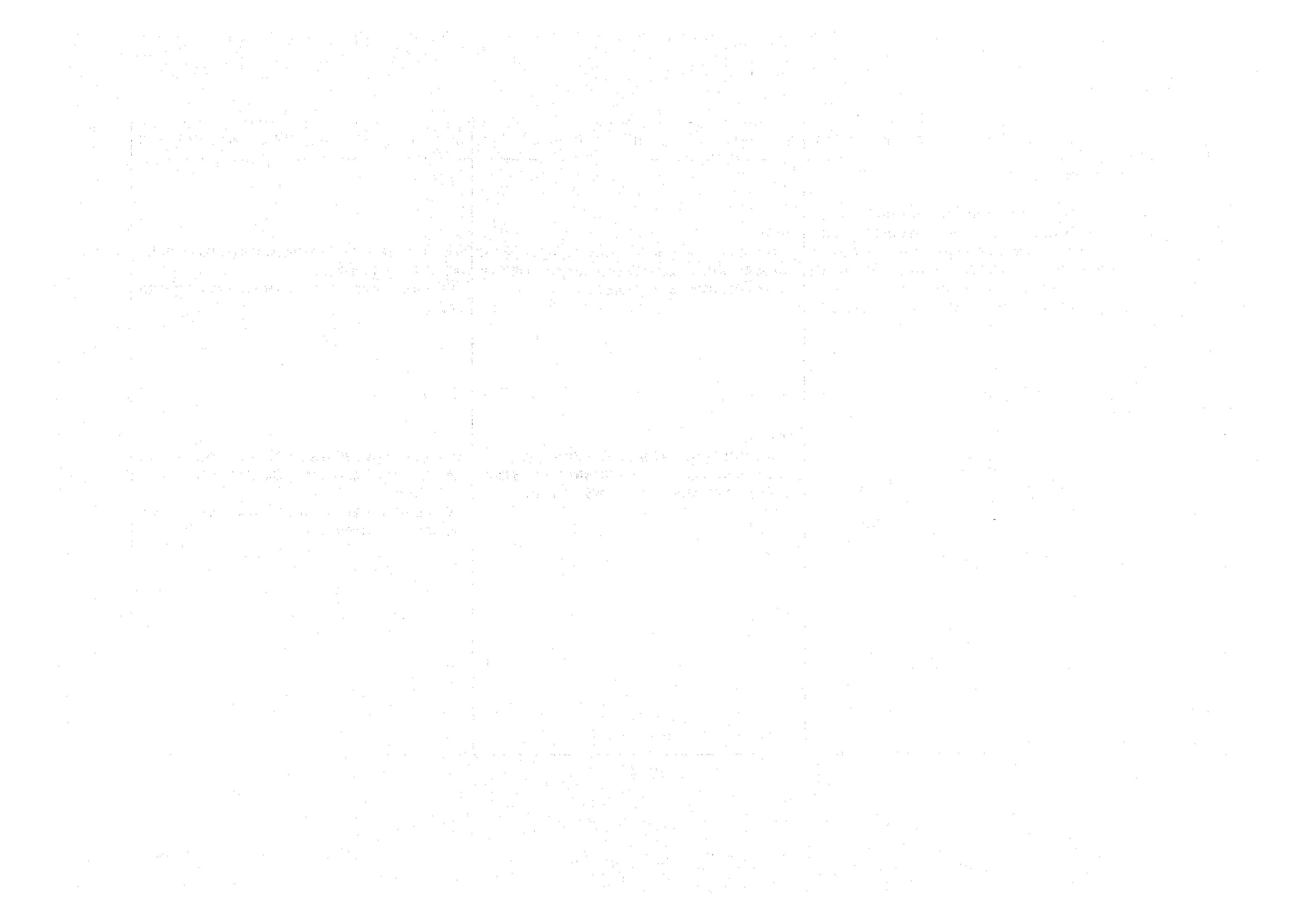
調査・確認・協議事項	現状・問題点等	調査団の対処方針
<p>II. プロジェクト協力計画内容について</p> <p>1. カリキュラム開発</p> <p>前回（平成4年10月）の巡回指導調査団の協議内容</p> <p>①中国の教育制度と密接な関係を持つことから早急な判断は回避し、現在進行中の教授法開発及び教材開発の状況を見極めたうえで、日中双方で十分に検討し、総合的な判断に立って調整すべき旨を確認した。</p> <p>②プロジェクト終了時にあるべきカリキュラム（案）の作成に向けての取組みにつき検討に取りかからなければならない。</p> <p>C. P. C. 等新たな教授法をカリキュラムに導入するとした場合、日本語クラスと他国語クラスとの授業数の差や総時間数の増加を始めとして関連各科の連係等教育体制面での調整が必要とされる。</p>	<p>①日中双方は教授法及び教材開発が部分的に完了、定着したのを受けて、本年から本格的なカリキュラム改善に関する日中双方の専門家によるカリキュラム委員会を設置しその改善（案）を本年7月末までに提案することとなった。</p> <p>今回現地セミナー（『中日高等医学教育カリキュラム検討会』）において改善（案）に対する日本人専門家からの意見を聴取とともに中国側セミナー参加者からの意見を聞き、これを参考として本年中に第一次（案）を作成する。</p>	<p>①講師（短期専門家）3名を派遣し日本側としてセミナーの実施を支援する。</p> <p>担当する講演のテーマ名：</p> <ul style="list-style-type: none"> a. 日本医学教育の現状 b. アメリカの医学教育の現状 c. 日本でのカリキュラム改善における経験と実績 <p>プロジェクト終了までのカリキュラム開発に係るスケジュールを確認し、ミニッツに盛り込み来年度実施計画に反映させる。</p>

調査・確認・協議事項	現状、問題点等	調査団の対処方針
<p>2. 教材開発</p> <p>前回（平成4年10月）の巡回指導調査団の協議内容</p> <p>①中国・衛生部の教育大綱および国家教育委員会の指針を踏まえ、基礎、臨床のべ40科目に及ぶ教材を開発することとした。これまで、双方の協力により32科目の教科が編纂されており、平成4年12月末までには34科目となり全体の85%が一応作成できる体制にある。また、病理学、生理学等の4ヶ科目では実際の授業で実施しており、更に修正、補足される段階にある。</p> <p>今後は、編纂された教材を授業で使用し、その補足、改定を実施するとともに未開発の教材については1993年度末までには完成させることで合意した。</p> <p>②現在開発している教材の捉え方並びに使用方法について一部理解の相違がみられたため協議の結果中国側の基本要求である中国医科大学の教育大綱を基礎として、学生の自主能力（応用力）がつくよう知識を盛り込む方向で開発を進めていくこととした。</p>	<p>①中国側は本年6月までに期限を設定して各教材を完成させる予定である。</p> <p>②開発される教材に対する考え方及び内容が日本側と中国側との間で依然異なっている。また、一部の教室では教材開発に携わる中国側担当者（実際に教材を編集する者）の日本語能力が低いため、日本側が提示した教材を改定補足できない。</p> <p>③開発された教材が実際の授業で使用されていない教室が見受けられる。（完成した教材については教官及び学生分を印刷し各教室に配布中である。）</p> <p>④短期専門家滞在中は熱心に教材開発作業に取り組んでいるが短期専門家帰国後は日常業務に忙殺され、開発作業がほとんど継続していないのが実情である。この原因は専門家滞在中は、ある程度、日常業務から外されているため余裕があるが、専門家帰国後は通常業務に復帰するためである。</p>	<p>①・最新の進捗状況につき中国側からの報告を受ける。 ・報告内容を勘案のうえ、平成年度計画（案）に反映させる。 専門家再派遣分野、強化する分野</p> <p>②各教室の日本語能力に応じて簡単な教材から隨時補足しつつ完成させる。</p> <p>③①とあわせ開発された開発された教材の使用状況につき（補足、改訂を含む）中国側の報告を受ける。</p>



調査・確認・協議事項	現状、問題点等	調査団の対処方針
3. 教授法開発 前回（平成4年10月）の巡回指導調査団の協議内容 ①教授法については日本側から供与された臨床・研究機材、日本語の医学参考図書および視聴覚機器を十分に活用し、学生の自主的な学習能力を強化するとともに新たな教材の導入を促進し、画一的な教授方法を改める。 従来より実施中の『専題総合講座』、『C. P. C.』及び『G. R.』の教授方法を更に定着させるべきとの考え方で意見の一一致をみた。	<p>①これまで日本側は学生の総合的な診断、治療能力養成の観点から『臨床専題講座』及び『C. P. C.』等の教授方法を提示しているが中国側の熱意とその定着が低いが一部の科目では臨床専題講座を導入、施行し、導入可能であれば正式授業として定着させることで中国側より提案した。（日本語医学班臨床総合講座の設置：1993年1月～7月）</p> <p>②日本人専門家から視聴覚教材（スライド等）を使用し講義方法を伝授しているが専門家帰国後は従来の講義の方法に切り替え、その技術の定着が低いと思われる。</p>	<p>①中国側、現地専門家から現況につき聴取（特に日本語医学班臨床総合講座の設置、実施状況）。 ・平成6年度計画（案）の聴取。</p> <p>②スライドプロジェクターの共同利用、暗幕の整備、スクリーン等設置の面での充実を図るとともに授業での活用を促す。 ・視聴覚教材を使用した講義方法等の定着状況につき聴取（定着の低い原因の分析）</p>

調査・確認・協議事項	現状、問題点等	調査団の対処方針
4. 臨床指導および共同研究 前回（平成4年10月）の巡回指導調査団の協議内容 ①臨床指導分野ではこれまでに来華した短期専門家により必要に応じて単発的な指導及び助言を行ってきた。しかしながら双方の指導、研究条件の調整が極めて困難なことから、今後は短期専門家の専門分野に沿って指導する。 また、共同研究分野ではさらに努力することで合意した。	<p>①臨床指導</p> <p>専門家の回診、症例検討会、臨床指導などにより実施されているが、医療機器の不良、不備、医療費の不足、診断データの管理不良など多くの困難な問題を抱えながら実施されている。</p> <p>②共同研究</p> <p>これまで脳神経外科竹下専門家とC／Pの間に論文あり。 カリキュラム委員会に渡辺リーダーが日本側代表として参加し、『医学教育』を共同研究のテーマとして取りあげる予定。</p>	<p>①臨床指導の取扱いについては昨年10月の巡回指導調査団と中国側との間で確認した方針で対応する。 ・臨床の強化についてはプロジェクト終了後の対応に含めて検討する。</p> <p>②昨年10月の巡回指導調査団派遣以降派遣された専門家あるいは今後派遣を予定されている専門家と中国側教室の間で実施可能のあるテーマがあるか聴取。 ・実現可能性の高い分野については専門家再派遣等を検討し、平成6年度実施計画（案）に反映させる。</p>



調査・確認・協議事項	現状、問題点等	調査団の対処方針
5. 技術普及 前回（平成4年10月）の巡回指導調査団の協議内容 ①今後も引き続きプロジェクトの本来業務において支障にならない程度でプロジェクトの成果を関係機関に普及させることとし中国東北地方の日本語による医学教育期間及びJICAが実施している医療プロジェクトに対して短期専門家による講義、講演を継続実施する。さらに全国の医学教育関係者を一堂に集めた『セミナー』を実施し、他の教育機関の現状を理解しつつ、あわせてプロジェクトの技術移転効果を紹介、普及する。	<p>①本年10月5日から10日まで『中日高等医学教育カリキュラム検討会』（現地セミナー）を開催し、カリキュラム改善につき討議の実施。</p> <p>②従来、短期専門家は中国医科大学の他に東北地方及び北京市において技術普及を兼ねた特別講演を実施してきたが中国側はあまり興味をもっていないようである。</p>	②技術普及に対する考え方、実施方法につき中国側の意見を聴取のうえ適宜協議を行う。

調査・確認・協議事項	現状、問題点等	調査団の対処方針
<p>III. その他</p> <p>1. 専門家の住宅環境</p> <p>前回（平成4年10月）の巡回指導調査団の協議内容</p> <p>①これまで中国側が行ってきた住宅環境整備に関し、多くの点で改善されつつあることを高く評価するとともに中国側の更なる改善を要望した。</p>	<p>①中国側も認めているが本建物は欠陥が多い。例えば、防音、防水が悪いうえ給水、給湯に制限がある。また長期専門家宿舎の厨房は狭く極めて貧弱と言わざるを得ない。中国側は随時短期専門家宿舎の改修工事を行い、部分的には改善されつつあるも、人的（管理者の素質）物理的（建物の構造上）の問題があり根本的な改善の見込みは極めて少ないと考えられる。</p>	<p>①・最近、市内に長期滞在者用民間住宅が建設されつつあるところ、長期専門家が希望すれば専門家宿舎を出れるよう中国側との意見調整を図る。（現時点では空き物件なし） 可能な範囲でミニッツに本内容を盛り込むこととする。</p>
<p>2. ローカルコスト</p> <p>前回（平成4年10月）の巡回指導調査団の協議内容</p> <p>①日本側は中国側が独自に付属病院を設立したことにより、プロジェクトの実施母体が拡充されたこととプロジェクト活動が年々活発になってきていることを踏まえて、本協力に対する中国側の熱意を評価した。更に、附属病院建設等を考え、本センターの円滑な運営、発展のため、人的及び財政面での強化を図る様要望した。</p>	<p>①本センター予算の大部分が附属病院建設経費に充てられ、事務費等のプロジェクト活動経費が逼迫している。日本側が供与機材、携行機材の通関手続のため、その都度中央官庁（国家科学技術委員会及び衛生部）へ出向き関係書類を作成する際の出張費及び短期専門家の送迎に係る出張費等の経費を支援しているが、中国側に根本的な予算不足という認識が乏しい。</p>	<p>①・本プロジェクトの予算につき昨年以降の中国側の改善点につき聴取。 ・現地業務費による支援にも限度があるので中国側の十分な予算措置につき申入れするとともに今後の経費計画の提示を求める。あわせて関係機関に予算措置を要請する。</p>
<p>3. 現行プロジェクト終了後の対応（案）</p>	<p>①大学側はこれまでの協力を基礎にセンター附属病院を使った生涯教育、卒後研修（臨床）を中心とするプロジェクトを継続したいとの要望あり。 ・衛生部はフォローアップでの対応を希望しているとの情報を得ている。</p>	<p>①中国側の構想につき聴取し、国内委員会で日本側の対応可能性につき検討する。（平成6年5月評価チーム方針決定への事前打合せ的位置付け） ・国家科学技術委員会、衛生部への報告</p>

② 会議議事録（日本語版並びに中国語版）

中日医学教育センター・プロジェクト巡回指導
調査団と中国側関係者との会議議事録（要旨）

国際協力事業団（以下「JICA」という。）が組織し、慶應義塾大学医学部 細田泰弘
医学部長を団長とする巡回指導調査団（以下「調査団」という。）は中華人民共和国における
中日医学教育センター・プロジェクト（以下「プロジェクト」という。）について、プロ
ジェクト開始からこれまでの業務実績・現況・進行状態を把握し、もって今後の技術協力計
画の詳細を協議・策定するため、1993年9月7日より同年9月12日までの日程で
中日医学教育センターを訪問した。

同センター滞在期間中、調査団はプロジェクトを効果的に実施するため、業務の進捗
状況および具体的協力内容に関して中日医学教育センター 何三光 主任をはじめとする
中国側関係者と意見を交換し、一連の討議を行った。

以下、その会議の結果を別紙のとおりに取り纏め、調査団と中国側関係者との間で確認
するものである。

瀋陽市
1993年9月9日

細田泰弘

細田 泰弘
巡回指導調査団 団長
国際協力事業団
日本国

何三光

何 三光
中日医学教育センター 主任
衛生部
中華人民共和国

1. 協力目的について

プロジェクト開始以来、この4年間に亘り、日中双方は、協力内容に沿って当初の目的である教育の改善に向けて、学生の自主学習能力を養成しつつ、これまでの画一した教授方法を改め、総合的知識の習得を目指した教育を実施する観点から、それに必要な教授方法の導入および教材の開発を進めてきた。具体的には学生の自発的学習に必要な日本語医学専門書の充実、ビデオ学習等の視聴覚機材の充実を図る一方、各科目の日本人専門家によるデモンストレーション講義並びに講演、および講義用教材の開発を行なってきた。

全体的にはおおむね当初計画通りに推移しているが共同研究分野では研究開始に必要な双方の条件が整わず、少數のテーマについてのみ実施中である。残された期間で新たなテーマの設定を行なう必要があろう。

(1) カリキュラム開発

本プロジェクトにおける教授法開発および教材開発が部分的に完了、定着したのを受けて、本年4月から本格的なカリキュラム改善に着手した。日・中双方は教育関係の専門家によるカリキュラム委員会を設置し、本年7月にその改善（案）を提言した。

これを受けて、10月に開催される現地セミナー（中日高等医学教育カリキュラム検討会）においてその改善（案）に対する評価を日本人専門家及び中国の教育専門家から聴取し、これを参考として本年度中に最終案を策定する計画である。

(2) 教材開発

中国・衛生部の教育大綱および国家教育委員会の指針を踏まえ、基礎・臨床のべ40科目に及ぶ教材を開発することとした。これまで、双方の協力により38科目の教科書原稿が編纂されており、本年度末までにはすべての教材原稿が完成できる。

また、病理学、生理学等の20科目では実際の授業で実施しており、更に修正・補足される段階にある。

今後は、編纂された教材を授業で使用し、中国側により更に補足・改定を実施するとともに法医学及び心理学の教材については1993年度末までに完成させることで合意した。

(3) 教授法開発

教授法については日本側から供与された臨床・研究機材、日本語の医学参考図書

および視聴覚機器を十分に活用し、学生の自主的な学習能力を強化するとともに新たな教材の導入を促進し、画一的教授方法を改める。

従来より実施中の『専題総合講座』、『C. P. C.』および『G. R.』の教授方法をさらに定着させるべきとの考え方で意見の一一致をみた。

(4) 臨床指導および共同研究

臨床指導分野ではこれまでに来華した短期専門家により必要に応じて単発的な指導および助言を行ってきた。これまでに脳外科分野において『中国と日本における原発性脳腫瘍の比較』につき、共同研究が行なわれた。また現在、医学教育カリキュラムに関するテーマについての共同研究も進行中である。

本分野では双方の指導・研究条件の違いからテーマ設定が極めて困難なこともあるが今後派遣予定の短期専門家を活用し、残された協力期間においてテーマの発掘・実施に努力することで双方の意見が一致した。

(5) 技術普及

今後も引き続き、プロジェクトの本来業務において支障にならない範囲でプロジェクトの成果を関連機関へ普及させることとし、中国・東北地方の日本語による医学教育機関およびJICAが実施している医療プロジェクトに対して短期専門家による講義・講演を継続実施する。

更に、来年度は本件協力の最終年度でもあることから、全国の医学教育関係者を一堂に集めプロジェクトの技術移転効果を紹介しつつ、関係者からの評価を・意見を聴取することとした。

2. 1994年度プロジェクト実施計画について

(1) 専門家派遣

教材開発状況に鑑み、その対象科目の中で未だ日本側から短期専門家が派遣されていない科目を最優先して派遣することで双方合意した。これを受け、日本側は国内の関係機関と協議したうえで可能な限り、次の計画に沿って調整を行うこととした。

前期分

派遣科目：心療学、産婦人科

派遣期間：1994年4月から1994年7月までに派遣（夏期休暇を除く）

後期分

派遣科目：微生物学

派遣期間：1994年9月から1994年11月までに派遣

但し、病態生理、整形外科、呼吸器内科、一般内科、一般外科、循環器内科につき中国側より短期専門家の派遣を希望する旨表明があった。

(2) 研修員受入れ

日中双方の関係者は1993年度の研修員候補者と面談し、専門知識・語学能力を総合的に判断したうえで次の者を1ヵ年間受入れることとした。

また1994年度についても研修員の受け入れを希望する旨中国側より表明があった。

氏名 (英文氏名)	性別	年齢	所属先および職位	研修分野	受入先
①魏敏杰 Mrs. Wei Min-Jie 女	30	薬理学教室	講師	薬理学	慶應大学
②張勁松 Mr. Zhang Jin-Song 男	38	眼科教室	助教授	眼科学	九州大学
③魏春果 Mr. Wei Chun-Guo 男	29	普通外科教室	講師	一般外科	九州大学
④張月蘭 Mrs. Zhang Yue-Lan 女	32	循環器内科教室	講師	循環器内科	東北大学
⑤康 輝 Mr. Kang Hui 男	27	検査科	講師	臨床検査学	慶應大学

(3) 供与機材

基礎医学分野の機器はおおむね充足されたが臨床分野における機器は当初計画の一部が導入されているのみである。よって今後はこれまで供与された機器のスペアーパーツ及び、臨床教育関係の機器の供与が適当である旨、双方の意見が一致した。

なお、日本側は供与された機材が十分に活用されるよう消耗品・スペアーパーツ等の財政的手当て及び迅速な調達を行うよう要請するとともに万全な保守・管理体制を整えるよう要請した。

(4) その他

日本側は附属病院の設立等事業の拡充に伴う状況を踏まえ、本センターの円滑な運営・発展のため、早急に人的および財政面での強化を図るよう要望した。

また、日本側はこれまで中国側が行ってきた専門家住宅環境整備に関し、多くの点で改善されつつあることを高く評価するとともに、中国側の更なる改善を要望した。

中日医学教育中心项目巡回指导调查团 与中国有关人员的会谈纪要

日本国国际协力事业团(以下简称JICA)组织的以庆应义塾大学医学部细田泰弘部长为团长的日本巡回指导调查团(以下简称“调查团”)为了解中华人民共和国中日医学教育中心项目(以下简称“该项目”)实施以来的工作成绩、现状与进展情况，并据此制定今后详细的技术合作计划，于1993年9月7日至1993年9月12日访问了中日医学教育中心。

在该中心访问期间，调查团为了使该项目有效地实施，就业务进展状况以及具体的合作内容与以中日医学教育中心何三光主任为首的中国方面的有关人员交换意见，进行了一系列的商讨、会谈。

双方确认的会谈结果整理如下，见附件。

一九九三年九月九日
于沈阳市

何三光

中华人民共和国卫生部
中日医学教育中心

主任：何 三光

細田泰弘

日本国国际协力事业团
项目巡回指导调查团

团长：细田 泰弘

附 件

1. 关于合作的目的

该项目开始4年来，中日双方按着合作内容，从当初的目的，即改善教育，不断培养学生的自学能力，改进单一的教学方法，进行以掌握综合知识为目的的教育观点出发，引进了必要的教授方法及进行了教材的开发。具体作法是：为了满足学生自学的需要，充实了必要的日语医学专业书籍及视听教育设备；此外，各学科的日本专家进行了示范授课、讲演，编写日语医学班用的教材。

总体来说该项目基本按着当初的计划进行；但在共同研究领域中，由于双方不具备开始研究的必要条件，现只进行了少数的研究课题，有必要在余下的期间内开展新课题的研究。

1) 教学计划的开发

教学方法及教材开发已经部分完成，并且固定下来，因此从今年4月开始着手进行教学计划的改革，成立了由中日双方教育工作者组成教学计划委员会，今年7月提出了改革草案。

在10月召开的研讨会(中日高等医学教育教学计划研讨会)上，将听取中日双方专家的意见，在此基础上于今年度中制定出最终方案，并付诸实施。

2) 教材开发

根据中国卫生部的教育大纲及国家教育委员会的方针，展开了基础、临床的40个学科的教材开发。目前，由于双方的努力合作，编写了38个学科的教材原稿，到本年度末将全部完成教材的原稿。

其中，病理学、生理学等20个学科的教材已经用于教学中，正处于进一步加以修改与补充的阶段。

双方对今后在教学中使用编写的教材，由中方进行补充、修改，法医学及心理学的教材将于1993年度末完成等取得一致的意

见。

3)教授法开发

充分利用日方提供的用于临床、研究器材及日本版的医学参考书、视听设备，增强学生的自主学习能力的同时，加强引入新教材，改变传统单一的教授方法。

双方一致认为在项目实施中进行的“专题综合讲座”、“C.P.C”及“GR”的教授方法等今后应该纳入教学计划继续进行，应该固定下来取得了一致的意见。

4)临床指导及共同研究

在临床指导方面，来华的短期专家根据各科的要求分别进行必要的指导或提出建议。在共同研究方面，脑外科已完成进行了“中日脑胶质瘤病理类型的比较”的研究；目前，为开发新的医学教学计划正在进行研究中。

双方一致认为由于双方的指导、研究条件不同，设立课题很困难，因此今后要充分利用短期专家，在余下的时间内努力发掘新课题，双方对此取得了一致的意见。

5)技术普及

今后继续在不影响本项目实施的情况下，将其成果向有关的机构普及；短期专家继续到中国东北地区有日语医学班的医学院校及JICA实施的医疗项目进行讲授及演讲。

明年是本项目实施的最后年度，全国的医学教育工作者将聚集一堂，介绍本项目取得的技术成果，听取有关人士的评价及意见。

2.1994年度项目实施计划

1)派遣专家

基于教材开发的现状，双方同意在预派的科室中优先向至今还没有派遣短期专家的学科派遣。

根据上述原则，日方在与国内有关机构协商的基础上，按下列计划进行调整。

前期派遣学科：医学心理学，妇产科

派遣期间：1994年4月～1994年7月（除外暑假）

后期派遣学科：微生物学

派遣期间：1994年9月～1994年11月

病理生理学，骨外科，呼吸内科，普通内科，普通外科，循环内科等科室中方希望再次派遣短期专家来指导工作。

2) 接受研修人员

中日双方有关人员与1993年度的研修候补人员面谈，在综合判断专业知识、语言能力的基础上，接受了下列人员研修1年。

中方希望1994年度日方继续接受研修人员

姓名 (英 文)	性别	年龄	单位	职称	进修专业	接收单位
魏敏杰 Wei Min Jie	女	30	药理学教研室	讲师	药理学	庆应大学
张劲松 Zhang Jin Song	男	38	眼科教研室	副教授	眼科学	九州大学
魏春果 Wei Chun Guo	男	29	普通外科教研室	讲师	普通外科	九州大学
张月兰 Zhang Yue Lan	女	32	循环内科教研室	讲师	循环内科	东北大学
康 辉 Kang Hui	男	27	检验科	讲师	临床检验	庆应大学

3) 供应器材

双方一致认为，按项目计划基础医学的器材基本充足，今后应当引入一部分临床领域的器材以及提供已经引进器材的备品与临床教育有关的仪器。

为使日方供应的器材能顺利地使用，要尽快地进行消耗品、备品的财政上的补贴申请，同时加强维修、管理体制。

4) 其他

日方希望随着附属医院的建立和扩大，为了本中心的顺利进行和发展，应尽快在人力及财力予以加强。

此外，日方对中方进行的关于专家住宅环境等诸多方面的不断改善予以高度评价，同时希望得到进一步改善。

③ 1993年中日医学教育センタープロジェクト進展状況概況（中国側提出資料）

1992年10月第二次中日医学教育センタープロジェクト巡回調査団のセンターに視察以来、このプロジェクトは、続いてきた中日両国政府の関心、JICA本部、北京事務所の指導、長期専門家、短期専門家の努力、中国医科大学の関係方面の協力のお蔭で、このプロジェクトは、決った目標に沿って、迅速に発展てきて、喜ばしい成果を挙げている。以下いくつの部分に分けて、下記のように総括報告する。

一、カリキュラム開発：

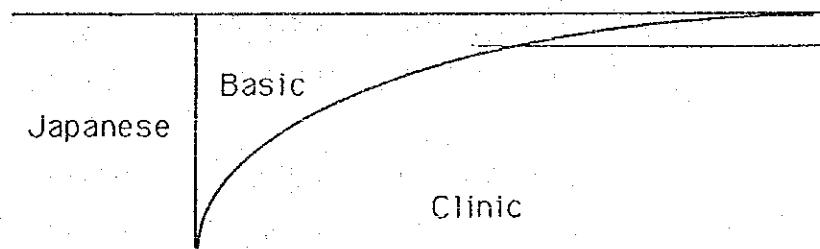
カリキュラムの開発は今年の重要な課題であるので、中日双方ともに極めて重視している。

今年の初め、4月13日充分な考慮した結果、日本側は首席顧問、調整員、滞在する短期専門家、中国側は関係部門の責任者、専門家、教授からなるカリキュラム委員会を発足した。詳細な研究、熱心な討論の結果、日本語クラスカリキュラム開発の目的、具体方案、実施方法と進展状況のアレンジを制定した。カリキュラム委員会の構成は附表1を見てください。

カリキュラム委員会が成立してから、8月末迄、大小会議12回を開き、カリキュラム草案について、繰り返し論じ、現段階で、第三案が既にできた。（表2）

今回のカリキュラム改革の指導思想は：

1. カリキュラム配置構造



2. 学生を早く臨床に接触させ、後期に基礎医学と結ぶ。

- a. 医学概論を新設した。（第三学期）
- b. 病院での見学時間を増加した（第四学期）
- c. 臨床科目を早めに開始した。例えば、外科総論、診断学はもとの第8学期から、第7学期に移した。
- d. 基礎科目の病理学、病態生理学、薬理学を二段階に分けて授業をする。

これが後期基礎医学と結ぶことの表れである。

3. 科学研究能力と独自学習能力の強化

- a. 科学研究に関する授業時間数を増やす。

統計学は以前の36時間から80時間になった。文献検索は以前の選択科目から必修科目になった。又、科学研究方法と論文の書き方などの科目を新設した。

- b. 第6、7学期に38週間の科学研究見習活動を設置した。

学生はグループに分けて、各研究グループの科学研究活動に参加させ、学生の科学研究能力を高める。

- c. 臨床専題講座をカリキュラムに入れて、初步的に七種類の専題講座を設置した。

4. 社会医学の強化

- a. 心理学を選択科目から必修科目に変えた。

b. 疾病スペクトルの変化に応じて、神経学が神経内科学と神経外科学に分科した。

5. 実験科目の新しく組み合わせ

化学については高校時代と重複した内容をカットした；機械分析などの新科目を増設した；無機化学と有機化学の実験内容を新たに組み合わせ、無機と有機の連係を強めた。

6. コンピュータの授業を強化し、以前の54時間から68時間に増やした。その目的は学生が後期の科学研究活動時にコンピュータで統計が行えることにある。

7. 断面解剖と臨床薬理学を増設した。

上述の改革案は今年十月の第三次中日高等医学教育計画セミナーに発表する予定である。その場の日本及び国内専門家の意見を聴取し、年末に最終の方案を提出する。

二、教材の開発

中国国家教育委員会と衛生部の教育方針と大綱に基づいて、中日双方専門家が協力し合って、基礎と臨床の40科目の教材編集を行った。今まで、38科目の教材の原稿は既にできた。今年の年末に全部完成できる予定である。中では、病理、生理などの20科目は既に新しいテキストで授業を行った。教材のさらなる補充と修正、教材開発の進捗状況は附表3を見てください。

三、教授方法の開発

前期の二年間で新しい教授法の部分導入が行われ、そのうえ日本側の臨床機材、研究機材の提供で、教師と学生が日本語の医学参考書と視聴設備を充分に利用することができるようになり、学生の独自学習能力が強化され、新しい教授法も実施することができた。“専題総合講座”、“C.P.C”及び“GR”のような教授方法はもうカリキュラム改革案に固定された。その具体的な内容が附表4を見てください。

四、臨床指導と共同研究

臨床領域に、外来、病棟で日本人の短期専門家の検査、診療を受けた患者の数が延べ25人に達する。第一付属病院の脳神経外科が短期専門家と一緒に“中国と日本における原発性脳腫瘍の比較”について共同研究を行った。基礎医学部生理教室と金子先生と“モルモット内耳有毛細胞single ion channel 記録技術開発”について共同研究を行った。そのほか、カリキュラム改革も中日双方の協力のもとで行っている。

五、技術普及

この一年来、本プロジェクトの本務に影響しない前提で、専門家に要請し北京、ハルビン、長春、大連などで講義、講演を行い、中日医学教育センターの遂げた成果を押し広めた。

六、専門家の派遣

1992年10月から今年の8月にかけて、延べ14人の日本人短期専門家がセンターにきて、授業の担当、教材の編集、共同研究、他の省、市への講演をして、センターの発展に重要な役割を果たした。この14名の専門家の仕事内容を附表5を見てください。

七、研修員の派遣

プロジェクト計画に従って、今年の五名の研修員は日本で勉強している。彼らの具体的状況が附表6を見てください。

八、プロジェクトの供与機材と短期専門家の携行機材

1992年度、1993年センターに届けた供与機材は合わせて6種類がある。総額で5000万円になる。なかで、カラー印刷機材は、中日医学教育センター印刷場に設置され、基本的に正常運営が行われている。目下、これらの機材が使える専門技術員の養成を積極的に行っている。

プロジェクトが化学教室に提供した分析機材は教育、研究上、重要な機能を發揮している。

8月までにセンターに来た短期専門家が延べ14人、持ってきた携行機材が40種129件ある。これらの機材は対象教室と科学的研究の発展を促進した。

供与機材の詳細が附表7を見てください。

九、視聴設備と図書資料

1. 視聴覚設備

1993年日本語と英語のビデオテープ205本を援助してくれて、総額が11,795,722円に達する。

視聴室：週の月～金曜の午前8：30～11：30時、午後13：30～21：00時、週の土曜日の午前8：30～11：30時の間開くこととした。視聴室の開放時間の延長は大勢の学生と教師に歓迎され、これらの進んだ設備を利用する人がだんだん多くなり、今年の6月までに延べ1050人に達した。視聴設備の利用が学生の学習

方法の改善、語学能力、独自学習能力と学習効果の高揚に大きな役割を果たしている。

2. 図書資料

1992年10月から今年の6月までセンターに3,444,469円、275冊の医学書籍を提供した。医学雑誌が182冊。この一年来、資料室へ来て資料を調べた教師は延べ138人、学生は延べ563人に達する。

図書資料室の開く時間：

週の月曜～金曜 午前 8：30～11：30時、

午後 13：30～21：00時

土曜 午前 8：30～11：30時

日曜 休み

十、第三次中日高等医学教育セミナーの準備

今年の計画によりますと十月に第三次中日高等医学教育カリキュラムセミナーが開く。その時全国34の医学学校の50名の専門家と学者が参加することになる。中国医科大学の105名の教師と日本語クラスの学生も参加する。セミナーには十題の講演題目が準備する。参加者達が中国、日本及び他国、例えばアメリカ、の医学教育の現状、経験について紹介、交流と研究を行う。今度のセミナーが中日両国医学教育改革の発展の促進に積極的な役割を果たすこと信じている。

第三次中日高等医学教育カリキュラムセミナー日程と具体的な内容が附表8を見てください。

付表 1 - 1

カリキュラム改革委員会（案）

主 任：	金魁和	渡辺陽之輔		
メンバー：	才 越	付啓瑞	朱柏志	劉国良
	李和泉	呂敏芝	金魁和	吳国宝
	張 戈	張乾忠	張惠珍	趙乃才
	姚 江	郭克健	路振富	赫明昌

(筆画順)

日本側チーフアドバイザー、調整員及び
短期専門家

カリキュラム改革委員会中国側メンバー一覧表

氏名	性別	職務	専門
金魁和	男	副校長	心理学教授
吳國寶	男	校長補佐	生理学教授
李和泉	男	センター常務副主任	病理生理学教授
付啓瑞	男	研究室主任	一般化学教授
趙乃才	女		薬理学教授
赫明昌	男		病理解剖学教授
劉國良	男	研究室副主任	内科学教授
張惠珍	女	研究室副主任	産婦人科教授
張戈	男	教務所所長	生理学副教授
張乾忠	男	研究室主任	小兒科学副教授
郭克健	男		外科学副教授
朱柏志	女	研究室副主任	日本語副教授
呂敏芝	女	教務所副所長	講師
才越	女	日本医学教育	講師
		研究所副所長	
路振富	男	センター業務所副所長	講師
姚江	男	教務課課長	講師

付表 2

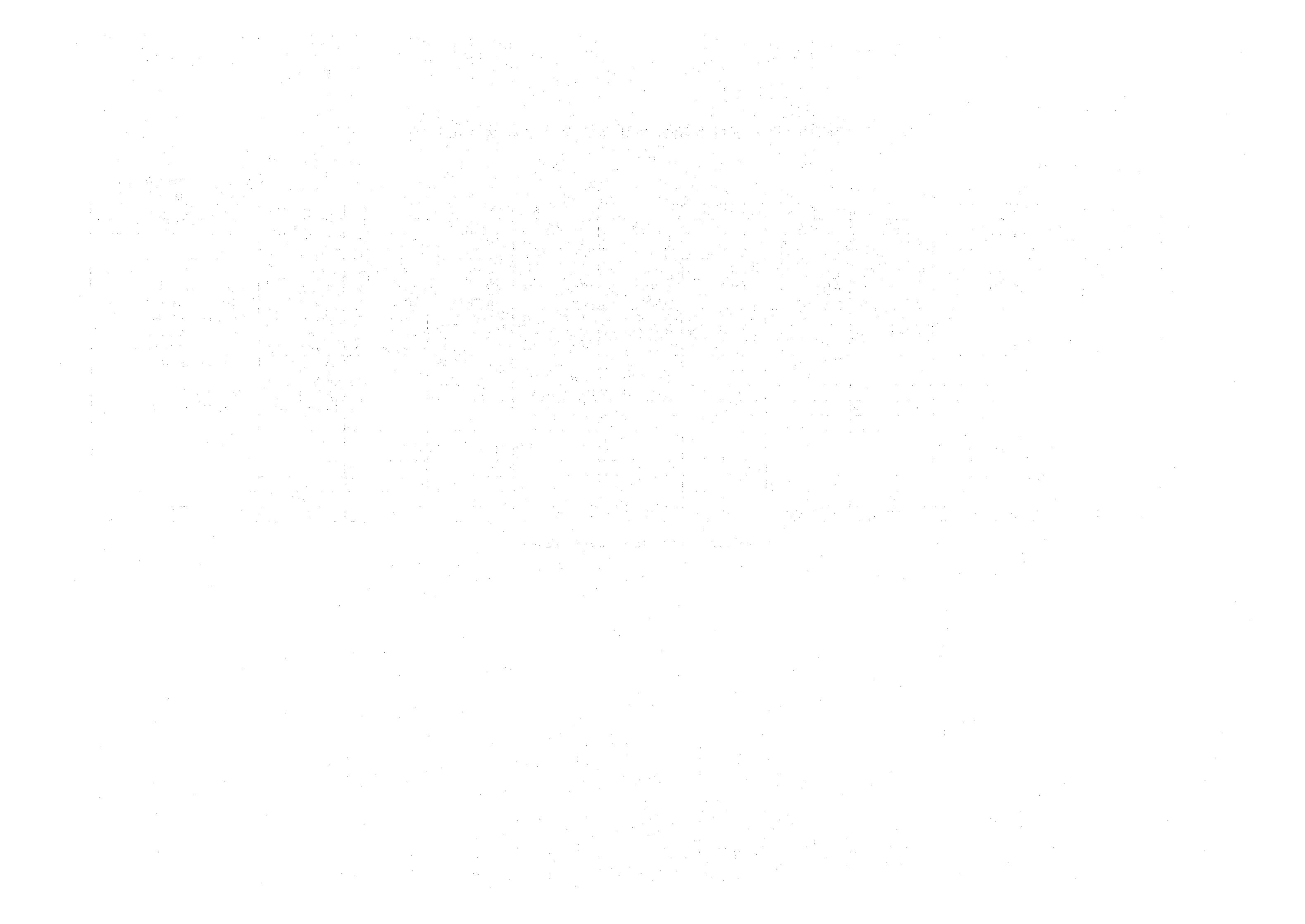
中国医科大学日本語医学班カリキュラム表（案）

1: カリキュラム表（六年制）

教務所1993.7.28

学年	I 学年		II 学年		III 学年		IV 学年		V 学年		VI 学年									
	学期	1 学期	2 学期	3 学期	4 学期	5 学期	6 学期	7 学期	8 学期	9 学期	10 学期	11、12 学期								
週		18週		20週		18週		20週		18週		18週								
必修	軍事教練	4週	軍事課	34	法律	36	哲学	54	政經	54	免疫	44	薬理	118	診断	154	内科	108	内科	72
	体育	28	体育	36	体育	36	体育	36	科学社会主義	36	微生物	68	寄生虫	50	放射診断	50	外科	90	外科	72
	日本語	232	日本語	310	日本語	214	日本語	108	日本語	46	生化学	136	遺伝	44	外科總論	42	産婦人科	90	小児科	72
	英語	112	英語	180	物理	90	医用化学	144	組織胚胎	84	医用化学	30	衛生	54	麻酔	20	伝染	60	神経内科	40
	德育	48			高等数学	80	解剖	162	生理	136	病理解剖	94	心理	40	局部解剖手術	96	核医学	36	神経外科	28
					コンピュータ-46		コンピュータ-30		病理生理	54	漢方医学	76	社会医学	30	法医学	30	臨床流行病	36		
					医学概論	20			細胞生物	36	科学研究方法*54		断面解剖	30	眼科	36	口腔科	20	精神病	20
									統計	36			倫理	20	耳鼻咽喉科	36	臨床講座	16	病理解剖	24
					早期病院見学								皮膚科	36					病態生理	18
					2週														薬理	8
																			臨床薬理	26
																			臨床講座	16
週授業時間数	30	28	29	28	27	24	24	25	25	24	24	30								
総授業時間数	420(120)	560	522	504(60)	486	480	432	500	450	432	80	(1280)								

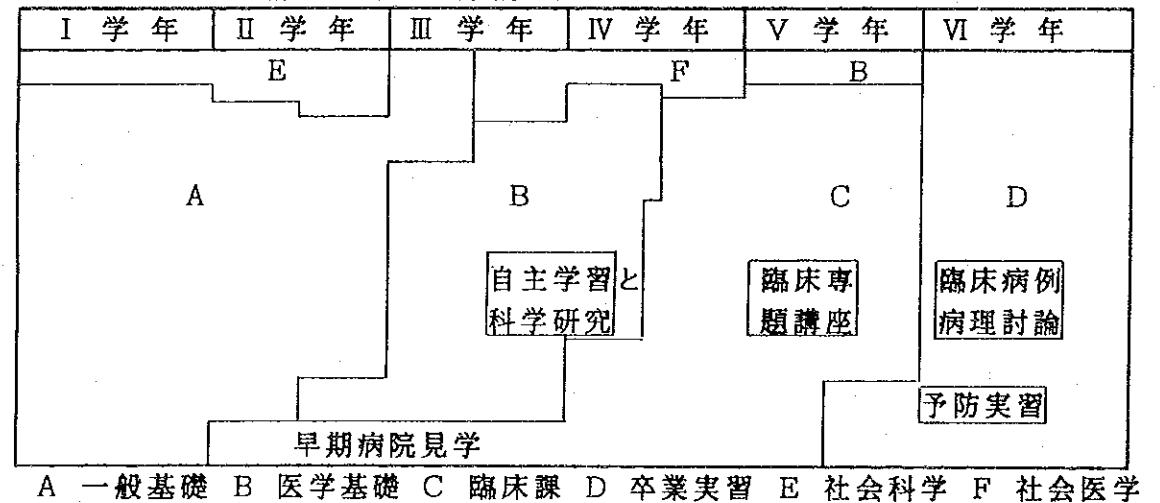
*科学研究テーマ選出、構想14、文献検索32、論文作成8



2 : 時間配分表

学年	授業	試験	入学教育	国防教育	早病院見期学	卒業実習	休暇	卒業教育	合計
1	34	3	1	4			10		52
2	36	4			2		10		52
3	38	4					10		52
4	38	4					10		52
5	36	6				2	8		52
6							41	2	1
合計	180	21	1	4	2	43	50	1	304

3 : カリキュラム構造と時間配分概念図



A 一般基礎 B 医学基礎 C 臨床課 D 卒業実習 E 社会科学 F 社会医学

4 : 各大学の授業時間数比較

カリキュラム	中国医大(旧)	中国医大(新)	東北大学	慶應大学	九州大学
日本語	990	910[910]			
教養科目	1478[1358+120]	1320[1200+120]	3080	1230	1710
基礎医学	1116	1154[1154]	1118	1253.8	1598
社会医学	282[162+120]	300[210+90]	224.9	247.5	303.5
臨床医学	2522[1262+1260]	2654[1392+1260]	2420.2	2530.5	2709
合計	6388[4888+1500]	6336[4866+1470]	6978.9	5245.5	6320.5

5 : 各学科授業時間数変化一覧表

学科	旧時間数	新時間数	増減数	学科	旧時間数	新時間数	増減数
国防教育:	[70]	[34]	[-36]	放射線診断	54	50	-4
軍事課	34	34	0	外科基礎	126	0	-126
軍事医学	36	0	-36	外科総論	0	42	+42
日本語:	[990]	[910]	[-80]	局部解剖手稿	0	96	+96
英語:	[276]	[292]	[+16]	眼科	38	36	-2
政治:	[280]	[144]	[-136]	皮膚	38	36	-2
中国革命史	80	0	-80	耳鼻咽喉	38	36	-2
マルクス原理-哲学	100	54	-46	麻酔	0	20	+20
社会主義建設-政経	70	54	-16	内科	208	180	-28
科学社会主义	30	36	+6	外科	186	162	-24
德育:	[98]	[84]	[-14]	産婦人科	100	90	-10
国際政経	20	0	-20	小児科	80	72	-8
法律	30	36	+6	漢方医学	80	76	-4
德育	48	48	0	神経学	44	0	-44
一般基礎:	[598]	[556]	[-42]	神経内科	0	40	+40
体育	136	136	0	神経外科	0	28	+28
高等数学	84	80	-4	伝染病学	70	60	-10
無機化学	108	174	+66	精神学	20	20	0
有機化学	108	174	+66	核医学	36	36	0
物理	108	90	-18	口腔	0	20	+20
コンピュータ	54	76	+22	臨床薬理	0	26	+26
医学基礎:	[1116]	[1154]	[+38]	臨床専題講座	0	32	+32
医学概論	0	20	+20	臨床病例(理)講座	0	80	+80
解剖	144	162	+18	社会医学:	[162]	[210]	[+48]
組織胚胎	90	84	-6	心理	0	40	+40
生理学	144	136	-8	倫理	30	20	-10
生化学	144	136	-8	衛生	54	54	0
細胞生物	64	64	0	社会医学	0	30	+30
免疫	36	44	+8	法医学	36	30	-6
微生物	72	68	-4	臨床流行病学	42	36	-6
病理	126	118(94+24)	-8	化学研究方法:	[36]	[90]	[+46]
病態生理	72	72(54+18)	0	文献検索	0	32	+32
薬理	126	126(108+18)	0	テーマ選出、構想、論文作成	0	22	+22
寄生虫	54	50	-4	統計	36	36	0
遺伝	44	44	0	集中教育:			
断面解剖	0	30	+30	軍事教練	4週(120)	4週(120)	
臨床課:	[1262]	[1392]	[+132]	早期臨床見学	2週(60)	2週(60)	
診断	144	154	+10	卒業実習	44週(1320)	43週(1290)	

付表 3

教材編成調査

1993年9月2日

一、終了科目

1、胸部外科	2、一般外科	3、血液内科	4、呼吸器内科	5、放射線
6、内分泌内科	7、循環器内科	8、診断学(呼吸、循環)		9、皮膚科
10、心臓外科	11、眼 科	12、整形外科	13、神経外科	14、病理
15、生 理	16、核医学	17、解剖学	18、有機化学	19、遺伝学
20、免疫学	21、寄生虫学	22、泌尿器外科	23、麻酔科	

二、未完成科目調査状況

番号	科目	原稿完成状況	コンピューターアイント状況	最終完成時期
1	薬理学	完成	98%	10月
2	無機化学	完成	80%	12月
3	生化学	完成	50%	12月
4	組織発生学	完成	30%	12月
5	病理生理	完成	40%	10月
6	衛生系	完成	30%	12月
7	診断学 (実験診断)	完成	0 %	12月
8	小児科	完成	60%	11月
9	消化器内科	完成	40%	11月
10	泌尿器内科	完成	0 %	12月
11	産婦人科	完成	90%	12月
12	微生物	完成	0 %	12月
13	耳鼻咽喉科	完成	50%	10月
14	医学心理学	編集中		1994年3月末
15	神経内科	完成	50%	10月
16	法医学	編集中	10%	10月中旬

付表 4

教授法開発

日本語医学クラス臨床専題総合講座

1993.9

番号	テーマ	担当者
1	動悸	李廷富(内科) 金万宝(薬理)
2	頭蓋内圧上昇	呂永利(解剖) 劉雲会(神経外科) 王慕一(神経内科)
3	呼吸不全	王宏達(呼吸器内科) 康 健(呼吸器内科) 李和泉(病理生理) 趙乃才(薬理)
4	腎不全	王力寧(泌尿器内科) 李和泉(病理生理) 趙乃才(薬理)
5	消化器出血	庄宝珠(消化器内科) 郭仁宣(一般外科) 李忠鉉(病理解剖)
6	血尿	王力寧(泌尿器内科)
7	遺伝子病基礎及びDNA診断	金春蓮(遺伝)

附表5-1 専門家の名簿

1993.9現在

年度	番号	氏名	性別	生年 月日	勤務先 大学・教室	職務	滞在時間
90 (6)	1	石村 翼	男	1935・8・16	慶應大・医化学(生化)	教授	6・19～8・11
	2	藤井 清孝	男	1946・12・16	九大・脳研外科	助教授	5・31～7・30
	3	石出 信正	男	1946・3・3	東北大・一内(循環)	講師	〃
	4	稻山 誠一	男	1925・8・20	慶應大・化学(薬理)	教授	9・17～11・10
	5	上田 豊史	男	1941・10・9	九大・泌尿器外科	助教授	9・27～11・28
	6	木村 時久	男	1940・6・1	東大・二内	講師	〃
91 (10) (2)	7	渡辺陽之輔	男	1924・12・5	慶應大・病理学	教授	5・7～7・12
	8	蓮尾 金博	男	1950・1・11	九大・放射線	講師	4・16～6・15
	9	大槻 昌夫	男	1941・9・2	東北大・三内(消化)	講師	〃
	10	一矢 有一	男	1948・12・16	九大・放射線	講師	6・1～7・31
	11	礒山 正玄	男	1947・7・16	東北大・一内(循環)	講師	〃
	12	曾我 紘一	男		JICA技術協力(調査団)		8・2～8・8
	13	青木 利道	男		JICA技術協力(調査団)		8・2～8・8
	14	山本 慧	男	1946・1・18	慶應大・薬理学	助教授	9・2～10・9
	15	佐々木 毅	男	1943・6・14	東北大・二内(泌尿器)	助教授	9・25～10・25
	16	田中 雅夫	男	1949・10・12	九大・一外(普通外科)	講師	〃
	17	関口 弘昌	男	1937・11・13	九大・麻酔学	助教授	11・5～12・1

年度	番号	氏名	性別	生年 月日	勤務先 大学・教室	職務	滞在時間
91	18	川又 健	男	1938.12.24	慶應大学 薬化学研究所（有機化学）	講師	12.3~92.1.15
92 (14)	19	向野 利彦	男	1946.5.16	九大・眼科	講師	3.31~5.10
	20	吉田 克己	男	1947.9.18	東北大・二内（内分泌）	助教授	4.7~5.25
	21	遠藤 一靖	男	1943.10.15	東北大・二内（血液）	講師	5.12~6.30
	22	内藤 誠二	男	1949.12.27	九大・泌尿器外科	講師	5.19~7.22
	23	植村 慶一	男	1935.1.31	慶應大・生理学	教授	5.26~6.22
	24	竹下 岩男	男	1945.11.17	九大・脳研外科	講師	6.16~8.8
	25	入 久巳	男	1929.8.25	慶應・中央検査部	教授	6.16~6.26
	26	大倉多美子	女	1943.1.29	慶應大・薬化研（普通化学）	講師	5.26~8.10
	27	安田健次郎	男	1929.10.19	九大 総合研究所（組織胚胎）	教授	9.24~11.7
	28	杉尾 賢二	男	1958.2.17	九大・胸部外科	助手	9.29~11.2
	29	相川純一郎	男	1954.7.27	東北大・小児科	助手	10.6~11.14
	30	蒲生 忍	男	1950.8.22	慶大・分子生物（細胞生物）	講師	10.6~11.7
	31	飛田 渉	男	1947.4.14	東北大・第三内科（呼吸）	講師	10.27~11.30
	32	加藤泰三	男	1944.12.23	九州・皮膚科学	助教授	11.3~12.24

年度	番号	氏名	性別	生年 月日	勤務先 大学・教室	職務	滞在時間
93 (10)	33	金子章道	男	1938.2.1	慶應大・生理学教室	教授	1・05～2・10
	34	向野利彦	男	1946.5.16	九大・眼科	講師	3・18～4・12
	35	木原弘二	男	1929.2.5	慶應大・遺伝学教室	教授	4・06～7・30
	36	大賀正義	男	1949.5.14	九大・整形外科（骨外）	助教授	4・20～5・21
	37	石川博通	男	1941.10.4	慶應大・免疫学教室	助教授	4・20～5・22
	38	加野象次郎	男	1941.11.29	慶應大・中央検査部	講師	5・25～7・09
	39	川又 健	男	1938.12.24	慶應大・薬化研（有機化学）	講師	6.22～7.03
	40	千田信行	男	1958.3.15	東北大・第三内科（超音波）	助手	6.22～7.23
	42	川村光毅	男	1934.6.14	慶應大・解剖学教室	教授	8.31～9.20
	43	大前和幸	男	1951.11.15	慶應大・公衆衛生学教室	助教授	8.31～9.30

附表5-2

専門家業績統計

序号	氏名	事情 調査 分野	講義		講座		教材 開発	医療指導		共同 研究
			次数	時間	次数	時間		次数	時間	
90 (6)	石村 翼	基礎	4	12						
	藤井 清孝	外科			11	22	○	11	33	
	石出 信正	内科						16	64	
	稻山 誠一	薬理			4	16	○			
	上田 豊史	泌尿			8	24	○	18	54	
	木村 時久	腎内	9	14	4	12	○	16		
計			13	26	27	74		61	151	
91 (10)	渡辺陽之輔	病理			5	12	○	2	3	
	蓮尾 金博	放射	1	2	8	32	○			
	大槻 昌夫	消化			12	37	○	7	21	
	一矢 有一	核医			8	26	○	13	42	
	磯山 正玄	循環			4	10	○	11	22	
	山本 慧	薬理			3	9	○			
	佐々木 賀	腎内	2	4	4	8	○	2	4.5	
	田中 雅夫	普外	2	4	3	6	○	3	6	
	関口 弘昌	麻酔			3	5.5	○	2	3	
	川又 健	有機 化学	3	5	1	2	○			
計			8	15	51	140.		40	101.	

序号	氏名	事情 調査 分野	講義		講座		教材 開発	医療指導		共同 研究
			次数	時間	次数	時間		次数	時間	
92 (14)	吉田 克己	内分 泌科	6	8	4	8	○	5	10	
	遠藤 一靖	血液 内科	7	28	4	10	○	4	13	
	向野 利彦	眼科	4	8	3	6	○	4	8	
	内藤 誠二	泌尿	4	14	4	7	○	4	8	
	植村 慶一	生理	1	2	2	3	○			
	竹下 岩男	脳外			2	4	○	14	36	
	入 久巳	中央検査部の一般情況を調査する								
	大倉多美子	無機 化学	5	20	9	36	○	教研 6次44学時		
	安田健次郎	組織 発生	3	6	4	8	○	教研 3次60時間		
	杉尾 賢二	胸部 外科			2	5	○	4	10	
	相川純一郎	小兒 科			5	10	○	3	6	
	蒲生 忍	細胞 生物	3	6	6	12	○			
	加藤 泰三	皮膚	1	2	7	14	○	7	15	
	飛田 渉	呼吸 内科			7	14	○	3	18	
計			34	94	59	137		57	228	

序号	氏名	事情 調査 分野	講義		講座		教材 開発	医療指導		共同 研究
			次数	時間	次数	時間		次数	時間	
93 (9)	大賀 正義	骨科			4	8	○	2	16	
	石川 博通	免疫 教室			3	8	○			
	向野 利彦	眼科 教室			4	10	○	3	6	
	木原 弘二	遺伝 教室					○			
	千田 信行	超音 波					○			
	加野象次郎	生化 学			5	10	○	7	14	
	金子 章道	生理			2	6	○	技術合作 1項 220 時間		
	大前和幸	公衆 衛生								
	川村光毅	解剖								
計					18	42		13	256	

附表6 研修員の派遣

1. 派遣の概況

1990年から今まで合計5回24名のメンバーを推薦し、面接試験に合格してから研修員として日本に派遣した。

年度	氏名	性別	生年月日	専攻	勤務先	職務	研修先	派遣時間
89	梁再賦	男	57・1・2	免疫学	微生物教室	講師	慶應大	90年3月26日、日本に赴き
	李厚沢	男	33・4・6	脳血管病	一院脳外科	助教授	九大	91年3月26日帰国
	任玉鵬	男	45・4・15	泌尿腫瘍	一院泌尿外	講師	九大	
	冷重光	男	51・7・22	脊柱外科	一院整形外	講師	慶應大	
	王 艷	女	56・11・5	神経生理	生理学教室	講師	東北大	
90	侯麗君	女	56・11・26	血液内科	一院血液内	講師	東北大	91年3月25日、日本に赴き
	劉緒田	男	37・12・12	一般外科	二院一般外	助教授	九大	92年3月26日帰国
	劉士良	男	46・9	消化内科	一院消化内	講師	東北大	
	尹 菊	女	46・10・12	産婦人科	二院産婦人	講師	九大	
	王沢興	男	34・9・23	病理学	病理学教室	助教授	慶應大	
91	劉 啓	男	56・8・19	消化外科	二院消化外	講師	九大	92年3月25日、日本に赴き
	肖衛國	男	56・7・30	血液内科	一院血液内	講師	東北大	93年3月26日帰国
	解 強	男	61・11・28	心臓外科	一院心臓外	講師	慶應大	
	路振富	男	54・4・7	医学教育	中日中心	講師	慶應大	

年度	氏名	性別	生年月日	専攻	勤務先	職務	研修先	派遣時間
92	李小白	男	63.5.30	精神医学	医学心理学	講師	慶應大	93年3月 25日日本 に赴き、 今在学中
	高沁怡	女	59.10.1	核医学	一院核医学	講師	九州大	
	沈 静	女	64.9.5	生理学	聴力研究室	講師	慶應大	
	劉北星	女	64.8.22	免疫学	免疫研究室	講師	慶應大	
	劉滿昌	男	63.12.18	腎臓内科	二院腎臓内	講師	東北大	
93	張勁松	男	54.3.31	眼科	一院眼科	助教授	九州大	94年3月 派遣する 予定、今 出国準備 中
	魏敏杰	女	63.6.29	薬理学	薬理学教室	講師	慶應大	
	康 輝	男	65.9.17	臨床検査	一院臨床検	講師	慶應大	
	張月蘭	女	60.8.2	循環内科	一院循環内	講師	東北大	
	魏春果	男	63.11.6	一般外科	一院普通外	講師	九州大	

附表7

1992年度93年到货的供应器材

第Ⅰ批	文字处理机	1套	491,600日元
第Ⅱ批	丰田面包	1辆	3,883,000日元
第Ⅲ批	教材印刷机械	1批	38,843,090日元
(国内购置)			
合计			43,217,690日元

付表 7

1993年に搬入の'92年度分供与機材

第一回目	ワープロ	1 セット	4 9 1, 6 0 0 円
第二回目	豊田マイクロバス	1 輛	3, 8 8 3, 0 0 0 円
第三回目	教材印刷機械 (現地調達)	1 組	3 8, 8 4 3, 0 9 0 円
合計			4 3, 2 1 7, 6 9 0 円

第三回日中医学教育セミナー日程表

10.5 受付

1993.6.30

	時間	内 容	報告者
10.6 (水)	9:00-10:00 10:00-10:15 10:15-11:30 11:30	開幕式 挨拶及び主席団メンバー紹介 休憩 中国高等医学教育カリキュラム改革の方針 記念撮影	国家教育委員会 王 鏞
	13:30-15:00 15:00-15:15 15:15-17:00	中国高等医学教育カリキュラムの現状と分析 休憩 アメリカの高等医学教育カリキュラムの現状	衛生部 今泉 勉
10.7 (木)	9:00-10:20 10:20-10:35 10:35-11:50 13:30-15:00 15:00-15:15 15:15-17:00	日本の高等医学教育カリキュラムの現状及び その趨勢 休憩 米中医学カリキュラムの比較により伝統的 カリキュラムの優位勢を論ずる 中国医科大学日本語医学班カリキュラム案 休憩 討論	尾島昭次 湖南医大 中国医大
10.8 (金)	9:00-10:20 10:20-10:35 10:35-11:50 13:30-15:00 15:00-15:15 15:15-17:00	九江医学専門学校の改革 休憩 一体カリキュラム構造優位性の初步的検討 質の良いカリキュラムにより多層な医学の人 材を育成 休憩 日本の医学教育カリキュラムの経験と実施	九江医專 ペチュー医大 上海医大 近藤健文
10.9 (土)	9:00- 12:00-	1. 閉幕式 a. 総括 b. その他 2. 医大見学 レセプション 場所: 職員食堂 挨拶	

表 8-2

第3回目中医学教育セミナー参加校

1993.9.1

番号	所屬	氏名	性別	年齢	職務	職稱	備考
1	国家教育委員会	雷建秀	男	57	副司長	教授	*
2	中国高等医学教育雜誌	耿剛	男	33	浙江大醫教所長	研究員助手	*
3	国学医学・医学教育分冊	王竹	男	62		教授	
4	衛生部	姚陳	男	31	司長	研究員助手	
5	北京医科大学	周解	男	58	處長	研究員	
6	中国協和医科大学	郭張	男	44	處長	技師	
7	中日友好病院	高李	男	31	處主任	主任醫師	
8	首都医学院	宋永	女	55	教學部主任	主館員	
9	新疆医学院	服志	女	48	教學部主任	員助手	1人分費用自己負担申請
10	第一軍醫大學	陸李	男	33	副處長	研究員	
11	同濟医科大学	彭郭	男	55	副處長	副教授	
12	湖北医学院	周羅	男	44	副處長	研究員	
13	湖南医科大学	張于	男	47	副處長	教授	
14	西安医科大学	陸塗	男	59	副處副所長	研究員	
15	上海医科大学	田華	男	56	副處副所長	助教	
16	上海第二医科大学	華譽	男	52	副處副所長	講師	
17	華西医科大学	金聰	男	37	副處副所長	教授	
18	福建医学院	仁肇	男	47	副處副所長	研究員	
19	重慶医科大学	雅明	女	56	副處副所長	副教授	
20	浙江医科大学	愛明	女	41	副處副所長	教授	
21	新疆石河子医学院	怡明	男	49	副處副所長	助教	
22	九江医專	陸張	男	47	副處副所長	教授	
23	南京医学院	塗祖	男	59	副處副所長	研究員	
24	ハルピン医科大学	陳趙	男	58	副處副所長	助教	
25	天津医学院	趙張	男	53	副處副所長	研究員	
26	内蒙古医学院	郝文	男	61	副處副所長	助教	
27	山東医科大学	麗素	女	51	副處副所長	研究員	
28	ペチューン医科大学	運春	女	45	副處副所長	助教	
29	大連医学院	忠憲	男	42	副處副所長	研究員	
30	錦州医学院	永德	男	43	副處副所長	助教	
31	瀋陽医学院	晏慶	女	43	副處副所長	研究員	
32	瀋陽藥学院	景世	女	32	副處副所長	助教	
33	吉林医学院	世新	女	53	副處副所長	研究員	
34	遼寧中医药学院	新穎	女	34	副處副所長	助教	
				57	副處副所長	研究員	
				56	副處副所長	助教	
				50	副處副所長	研究員	
				52	副處副所長	助教	
				37	副處副所長	助教	
				50	副處副所長	講師	

合計：49名

* 大会發言

